

最終報告書レポート

「海洋アジアの世界観のさらなる探求と、その表現の追求のためのリサーチプロジェクト」 活動成果報告と今後の取り組みについてのレポート

1. 活動概要：各滞在先の紹介(渡航情報)とリサーチプロジェクトの実施報告

今回滞在した4つのコミュニティでは、それぞれ漁撈を生活の糧とする一家にホームステイし、海を中心に営まれる暮らしを身近に体験・参加しながら、日常的に海に同行し、撮影・フィールドワークを行った。

アヨケ島(スリガオ州南部)



(写真左：ブトゥアンからカンティランへトライシクルでの移動／真中：カンティランの船着き場／右：渡海中の船上から望むアヨケ島)

マニラから空路でミンダナオの都市ブトゥアンへ。ブトゥアンの空港では、滞在を通して同行してくれるThe UnifiedfieldのAngely Chiと合流。ブトゥアンからは、トライシクルに乗り陸路でミンダナオ東端の港街カンティランへ。カンティランの船着き場ではアヨケ島から迎えに来てくれたホームステイ先の家族の船=エンジン付のアウトリガーカヌーに乗り、ラヌーザ湾を太平洋方面に1時間ほど渡海するとアヨケ島に到着する。



フィリピン海溝のすぐそばに浮かぶこの小さな島には現在およそ100世帯の人々が暮らしている。彼らのほとんどが大戦後に移住した家族の二世・三世にあたり、島全体が一つのコミュニティのようになっている。電源は太陽光発電、飲用から生活用水の全てが山の湧き水でまかなわれている。人の生活が大幅に機械化、産業化される以前の暮らしが今も生きている希少な環境である。コミュニティの世話人的な存在である女性と、熟練の漁師であるその夫と息子達の一家にホームステイし、2階のスペースを間借りした。

(写真左：ホストファミリーとの食事の様子／右：間借りした2階の部屋入口と作業スペース)



(写真左：早朝の漁の撮影・リサーチ風景／真中：夕方の漁の撮影・リサーチ風景／右：撮影したイメージを皆で見ている様子)

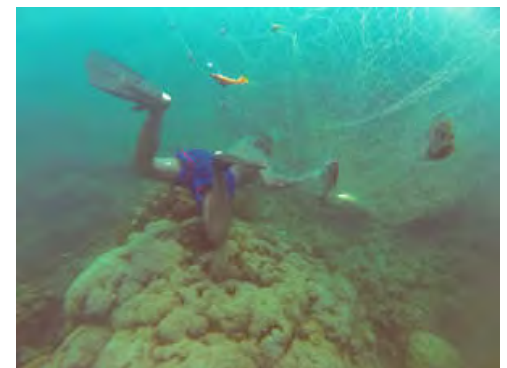
朝/夕各2回、1日計4回、このシーズンならではの漁網をつかった漁を行うホームステイ先の父親とその息子達に同行し、撮影・フィールドワークを行った。コンディションさえよければほぼ毎日出漁していたが、海は、そして海を舞台に営まれる人間の生きた風景は、二度と繰り返すことなく、いつも全く違う姿を見せてくれた。この海での体験を通して、初めて、自分の仕事は、いかにして世界を「撮る=take/捉える=capture」のかではなく、世界が向こうから開いてくれるその姿を、いかにして「受け取れるのか=receive」なのではないかと直感した。漁師を中心に、島の人たちと定期的に撮影したものを共有する時間は、私の受け止めた彼ら自身を含む世界の姿にたいして、彼らの生の反応を伺い知れる貴重な機会であり、また同時に、事前に設定された取材ではなかなか聞く事のできない、誰からともなく自然と始まり派生する、海や暮らしにまつわる話を聞ける貴重な時間となった。

マティーナアプラヤ・バジャウコミュニティ



(写真左: 陸からみたコミュニティの風景／真中: 海側からみたコミュニティ／右: ダバオ湾へと続く海岸線と船着き場)

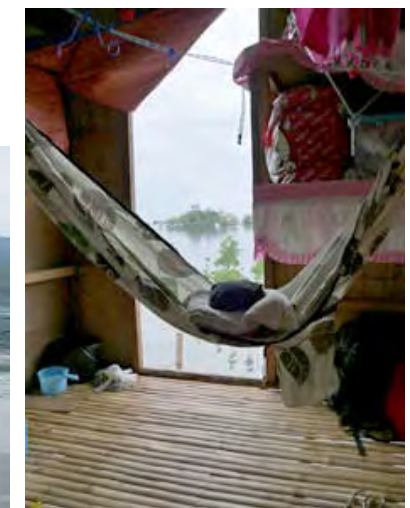
アヨケ島を去り、カンティーランの港からブトゥアン経由で陸路を移動。バンと夜行バスを乗り継いでおよそ半日かけてダバオ市内に到着。ダバオ湾に面した市内中心部のバジャウ族のコミュニティで、パイオニアである一家に、約10日間ホームステイした。元来は家船に住まい海を漂いながら暮らしていた海の民であるバジャウ族の人々。紛争や海賊による襲撃、政府の政策や環境の変化などによって、本来の里海での暮らしを続けることが困難になり、都市部に提供されたこのような居住地への移住を現在も余儀なくされ、世帯数は変動しながらも増え続けている。



(写真左: 漁の合間にとる船上での昼食／真中: 海での撮影の様子／右: 海中で撮影した漁の様子)

海での家船の暮らしを知る最後の世代の一人でもあるホームステイ先の一家の父親。スピアフィッシングの名手でもある彼を中心に、毎回構成の違う老若男女のメンバーで、スピアフィッシングや漁網を使った漁に同行することができた。暮らしの現場が海上から陸上へと少しずつ移りつつあるなか、姿や形を変えながらも日々の生活のなかで生かされ継承されていく生活文化や知恵を、彼らの営みそのもののなかに捉えることができた。

サンタクルーズ・バジャウコミュニティ



(写真左: 干潮時、海側から見たコミュニティの集落／真中: 船着き場／右: 居候したマングロブの汀に建つ高床式の家屋)

ダバオ市内からバンもしくはバスに乗り約1時間でサンタクルーズのバスターミナルへ到着。そこからさらにトライシクルで20分程移動するとコミュニティに到着する。同じダバオ湾の対岸にあるマティーナアプラヤのバジャウコミュニティとは親族関係にあるこのコミュニティ。タウィタウィ群島への渡航中止を経ての直前の調整にも関わらず、快く滞在を許可してくれた。コミュニティのリーダーである女性の協力によって、海岸に突き出した、まさに海の家に住む一家に居候し、約10日間共同生活をしながら撮影やリサーチ、作品の構想を行った。



(写真左:船上での撮影風景／真中:獲れたての魚介類で昼食を準備するコーディネーターと漁師／右:撮影したものを皆で鑑賞)

村のリーダーの協力を得て、スピアフィッシングや、延縄漁の一種、また漁網を使ったものなど、それぞれ異なる漁法を得意とするコミュニティの漁師と複数回、海に同行することができた。同じ素潜りという条件で、共に身一つで海中に潜り、船上ではその日獲れた恵を皆で分け合い食す。そんな、人間としての根源的な体験を共有していると、初めて訪れたコミュニティで、初対面であるということのを忘れさせる程、言葉による対話以前の、生き物としての信頼感が少しずつ確かなものになっていくのを実感し、日々有機的に築かれてゆく関係性のなかで、撮影やリサーチを行う事ができた。さらに船上での漁の待ち時間などには、Angelyの通訳の助けを借りながら、日々の生活について、海について、漁について、人生についてなど、さまざまな話しを聞いた。人の心が広々とした海に解放され開かれていくのを彼らの声や表情に感じながら、海と人の営みについてさらに思考を深めた。

バランガイ・カブアヤ



(写真左:集落から街へ出る唯一の足であるジブニー／真中: 山間地帯と集落の家屋 /右:太平洋へ船を出す漁師たち)

ダバオ市からほぼ1日かけて夜行バスとジブニーを乗り継ぎ、ミンダナオ南東部の半島に位置する小さな集落に到着。背景には、絶滅危惧種のフィリピンイーグルも生息する豊かな山間地帯が迫り、目の前には広大な太平洋が広がる、山と海の狭間に位置するコミュニティには、主に4つの民族が共同で暮らしている。



(写真左: 漁網をつかった浅瀬での魚の撮影／真中: 疑似餌と釣り糸で大型の魚を狙う漁／右: スピアフィッシングの様子)

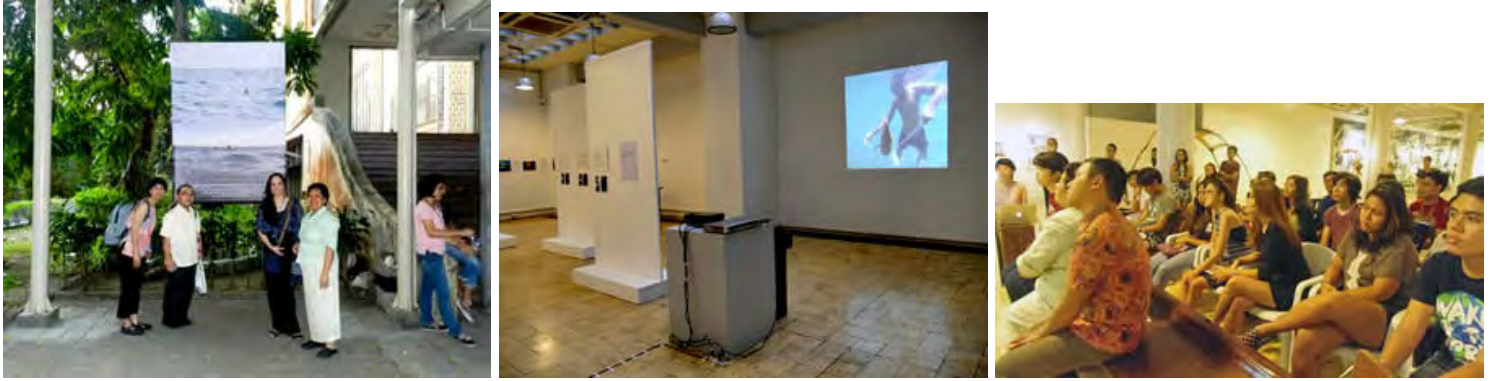


太平洋の目の前に暮らすマンダヤ族の一家に、およそ10日間ホームステイしながら、スピアフィッシング、漁網や手作りの疑似餌を使った様々な漁に同行し、撮影とフィールドワークを行った。漁のあとには決まって、海岸沿いに自然と発生する人の輪に入れてもらい、その日獲れた魚介類を食しながら、海にまつわる話や集落の内情、地震や津波を含む自然現象、また海と山と共にある暮らしについて、様々な話しを聞くことができた。

(写真左: 道具の創作についてのドローイングを描いてもらう様子)

2. 受入機関での活動状況やコラボレーターとの共働内容

個展「Human Seascape」開催／Bulwagan ng Dangal University Heritage Museum



(写真左: ミュージアムの入口にある展覧会バナーの前で、左から作家本人、国際交流基金マニラ事務所所長上杉氏、本展キュレーターCeciliaDe la Paz教授、Zayas博士／真中: 展示風景／左: アーティストトークの様子)

今回のフェロウシップ推薦者でもあるフィリピン国立大学・国際研究センター長の海洋人類学者Cynthia Neri Zayas博士の招待により、同センターの主催で、大学構内にあるBulwagan ng Dangal University Heritage Museumを会場に、4月26日から5月18日の期間、個展「Human Seascape」を開催した。またオープングレセプションではアーティストトークを行い、数年に渡り取り組んで来た海と人にまつわるプロジェクトをベースにした今回の展示作品が、トーク次の日からスタートするリサーチプロジェクトにどのように繋がっていくのかなどを話した。

ワークショップ「Plastic Human Seascape」開催／アヨケ島



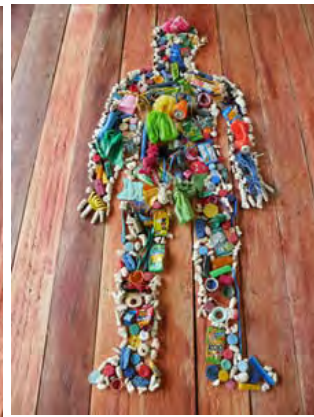
(写真左: 大人たちとのワークショップで世界のプラスチック汚染の資料を上映している様子／真中左: 島の現状を把握する為のゴミ・資源集め／真中右: それぞれ改善案を考えている様子／右: 改善案やアイデアの発表の時間)

今回のリサーチプロジェクトの現地受け入れ団体である『The Unifiedfield Nomadic Artist-In-Residence Program In The Philippines』との共働により、アヨケ島にて、地球規模で深刻化する海洋環境汚染に関するワークショップを企画。なかでも、島を含め、誰しもの日々の生活に目に見える形で直結しているプラスチック汚染についてのワークショップを行った。漁に出る人、コブラを作る人、子守りをする人、子ども達など、年齢や仕事の内容などによって島の人にはそれぞれの生活リズムがあり、空き時間のタイミングも異なってくる。できるだけ幅広く多くの人に参加してもらえるよう、人の集いそうな機会や流れを見つけては瞬時に場を設け、その都度開催した。



(写真左: 子ども達とのワークショップで資料映像を上映している様子／真中左: 子ども達と集めた資源ゴミの分別ゲーム／真中右: 拾ったビニール袋を再利用してロープをつくるワークショップ／右: ワークショップで提案された改善案から実行・設置された資源の分別コーナー)

試作アニメーション
「Ocean Karma」の制作



(写真左: 集めたゴミを選別する作業/他全て:コマ撮りアニメーション作成作業風景)

天候の影響などで漁に出られない時間を利用して、海で集めた貝、珊瑚、石などの自然素材と、プラスチックの破片や廃材を使って、コマ撮りのアニメーションを作成。海のプラスチック汚染が進むと、巡り巡ってその原因を作った人間の人体に還ってきているという現状を、ワークショップ時に子ども達に伝えるための素材として使った。

創作ワークショップ『AHAP! (good!)』開催
マティーナアプラヤ・バジャウコミュニティ



(写真左: ワークショップの参加者を募るポスター/他全て: ワークショップ開催当日の様子)

マティーナアプラヤ・バジャウコミュニティでも、The Unifiedfieldとの共働で、海と暮らしの環境に関わるワークショップを検討した。着目したのは、毎日子どもたちが作っては見せに来てくれた手作りのミニチュアボートだ。ありあわせの廃材や端材などを使って、漁で使うアウトリガーカヌーのミニチュアを精巧に作り上げる。ワークショップでは、そんなバジャウの子どもたちを講師として迎え、一緒にボートを作りながら、プリコラージュの達人である彼らの優れた創造性と柔軟な応用力から学ぶ機会にしたいと思った。また、コミュニティの外から広く参加者を募り、社会のなかで偏見を受けやすい彼らの本来の優れた能力や豊かな感性に直に触れる機会にしたいと思った。当日は、ダバオ近郊から作家や建築家、また複数の親子連れが参加し、大にぎわいのなか、思い思いのボートを制作。想像力を働かせて、自分の手で何かを作り上げて行く楽しさを共有できたのではないかと感じた。またワークショップ参加者の間で、先住民族の生活文化の伝統とその保護をめぐる諸問題について、興味深い議論が展開した。この議論はその後開催したコミュニティ内での展示会に重要な思考のヒントをくれた。

展示会『MAGBAHA-O』開催/マティーナアプラヤ・バジャウコミュニティ



(写真全て: 多くの人の協力によって、集落内の会場で展示が立ち上がっていく様子)

当初予定していたギャラリースペースが急遽使えなくなり、新たに、バジャウコミュニティ内での展示会の開催を発案。ひとつの有機体のようなコミュニティの真中にある広場で、コミュニティの人々やダバオ市界隈の友人達の手を借りながら、展示会の準備を進めた。私達にとってもコミュニティにとっても初めての試みとなったコミュニティを会場とした展示会。準備段階から開催を通して、なにか未知の新しいことが起こり形を成していく現場に共に携わる喜びを、共有することができたと実感した。また同時進行で、市内ミントル地区にあるスタジオスペースで、ドローイングや映像作品の制作を行った。



(写真左: 展覧会のDM/真中左: オープングレセプションの様子/真中右、右: 映像作品を見るコミュニティの人々)

The Unifiefield のAngely Chiによるキュレーションのもと、「MAGBAHA-O」展(バジャウ族の言語=シナマ語で、移り変わり、変容という意味)を開催。昨年と今年のコミュニティでの滞在経験を基に制作した写真、映像、ドローイング作品、そして子ども達と共同制作のミニチュアのポートが主役のインスタレーションを展示した。オープニング当日には、会場であるコミュニティの人々を始め、近隣のビサヤコミュニティやダバオ市内からも多くの人々が訪れ、人々のエネルギーが交わり、熱気に包まれるなか展覧会はスタートした。



(写真左: コミュニティ内からみた展示会場/真中左: 家族の写真を見ながら談笑するコミュニティの女性たち/真中右: 子どもたちと共同制作のポートのインスタレーション/右: 写真を鑑賞する子どもたち)

7/18~7/23と6日間の会期中、展覧会場は、コミュニティの人がふらりと立ち寄っては作品や、作品のなかの自分たちの姿や暮らしを客観的にみたり、再発見する場になり、子どもたちの格好の遊び場となり、またコミュニティの外からの訪問者たちとバジャウ族の人々が、彼らの暮らしの現場で直に出会い、接触する場となった。

アーティストトーク「When the Solid Begins Turning Fluid」開催/Los Otros



(写真左: トークの広報ポスター/真中左: Los OtrosのShreen(左)とThe UnifiefieldについてトークをするAngely(右)/真中右: 作家本人(左)とAngely/右: トークに集ったオーディエンス)

7/23にダバオでの展覧会最終日および搬出を終え、国内線でマニラへ移動。7/25に、共にマニラを拠点とする"Green Papaya Art Project"と映像作家デュオ"Los Otros"の共同企画により、Los Otrosのアートスペースにて、『When the solid begins turning fluid』と題して、今回のリサーチプロジェクトや今後の作品の展開に関するプレゼンテーションを行った。また、同行したAngely Chiも、The Unifiefieldの運営するレジデンスプログラムについてのプレゼンテーションを行った。

3. フェローシップ活動を終えてプロジェクトに関する今後の予定や展望

「Asian Arts Air FUKUOKA」での報告トーク開催／福岡市



(写真左上: トークイベント広報イメージ/右: トーク開催当日の様子)

帰国直後の8/6、「Asian Arts Air FUKUOKA」主催により福岡市内で開催されたトークイベントにて、今回のリサーチプロジェクトの報告、また今後の作品展開についてのトークを行った。

「DOMANI・明日」展／国立新美術館での作品発表(予定)



(発表予定の作品要素-写真左: 映像作品「カブガス」のワンシーン/真中右: アヨケ島の女性と共同作成中のKosudKosud)



(写真左、真中: サンタクルーズ+マティーナアプラヤにて作品制作のための撮影の様子/右: 左の撮影写真をベースにしたドローイング作品の試作)

フェローシップでの活動やリサーチを通して得た素材、インスピレーション、新たな思考を基に、現在制作取組中の作品を、2016年12月10日から2017年2月5日まで国立新美術館で開催予定の「DOMANI・明日」展にて発表予定。

文中に含まれる施設、活動拠点の情報

○The Unifiedfield Nomadic Artist In Residence Program In The Philippines

<http://www.tufnomadicaiph.org/>

○Green Papaya Art Projects

<http://www.greenpapayaartprojects.org/>もしくは<http://ja-jp.facebook.com/greenpapayaartprojects/>

○Los Otros

<https://www.facebook.com/losotrosfilms/>